

心理学からみた質的研究

サ ト ウ タ ツ ヤ

(立命館大学人間科学研究所専任研究員(文学部助教授))

0 はじめに

本日は質的研究のあり方について心理学にこだわった立場から語るとどうなるかということをお話したいと思います。質的研究の定義は後で説明しますが、心理学、社会学、看護学という学問はそれぞれにこだわって研究することで質的研究方法が発展すると考えています。



統計という方法のことを考えると、心理統計もあるし社会統計もあります。さらにいえば医学、生理学、薬理学、経済学、とにかく色々と使われていてその分野ならではの発展をしています。重要なのは問題を解くことであって、方法ではないはずです。問題をどう設定するのかということは、学問にある程度規定される部分があるので、ここでは心理学ということをおえて前面に押し出しておく、ということです。こういう規定をするのは、私個人の由来、心理学の訓練を受けてきたことに関係しています。私は他の方が心理学以外の学範(ディシプリン)に依拠して質的研究について語ることを否定するものではありませんし、むしろ期待しているものです。

何にも依拠しないでピュアな純粹培養のような質的研究というものがあるとは考えられないのだから、前提をもちながら話をすすめたいと思います(心理学がどうしたみたいな話に興味の無い方は第2節からお読みください)。

1 心理学の歴史から

心理学が成立したのは19世紀の半ばから末頃ですが、そのときに何が問題だったかという、精神の問題だと思います。精神の問題はいろいろ扱い方があるわけで、自然的に考えることもできるし、哲学的、たとえば20世紀頃に現れた現象学のように徹底的に考え抜く方法もありますが、19世紀に成立した心理学においては、精神を科学的に扱うべきであるということがそのモチーフになっていました。それによって心理学という学範（ディシプリン）が大きく広がってきたことは疑いのない事実だと思います。19世紀末には心理学者はわずしかいませんでした。たとえば心理学の父とされるウィルヘルム・ヴントという人はライプツィヒ大学で哲学の教授だったわけで、心理学者なんてのはいなかった。1879年という年が象徴的に心理学成立の年とされていますが、その後にしても、ドイツで哲学者的心理学者と呼べる人は10人くらいしかいなかった時代です。それが、120年たった今、どれだけ心理学者がいるか。日本だけでも6000人はくだらないのです。こうした拡大を可能にしたのは、精神の問題を自然科学的方法で扱おうとしたことに（それ唯一の理由ではないとしても）拠ると思われれます。

1 - 1 初期の成立過程でどういうことが問題になっていたか

当時、「感覚」及び「感覚と知識の関係」が問題の1つだったような気がします。もう一つは「発達」と「進化」の問題です。キリスト教的な考え方では、神と人間が、その他の動物とは異なっているという発想でしたから、進化論の主張は奇異に感じられた。奇異どころじゃなく驚異として感じられたのです。人間とその他の生き物は近いが神というものが違う存在なのだという境界線の引き直しが進化論によって提唱された。そこで発達、進化が問題になっていき、そもそもそれが世界を想像した神という存在への疑問をも引き起こし、人々がキリスト教的世界観から脱却するという事になったわけです。

精神という場合、心理学の成立期において、この二つの問題、感覚の問題と発達の問題が焦点をあてられたと考えられます。

心理学をやった人なら誰でもこういう図形を見たことがあると思います。たとえば、事典類やテキストにはたくさんの図が載せられています。いくつか見てみましょう。いずれも有名なものです。たとえばミュラーリヤー錯視、これは上下の線の長さは同じなのに違って見える。もう1つは通称バウムクーヘン錯視。AとBの大きさは同じですが、上が小さく見える。これを応用すると、小さいバウムクーヘンをBの位置に置くと大きく見えるので、自分がAをとると大きい方を食べることができる、ということになります。

しかし、錯視図は多すぎないか？過剰じゃないか？そういう風にも思ったりします。平凡社の『心理学事典』には実に多くの錯視図が載っていましたが、学部生の頃にそれを見たとき、過剰さが迫ってきたことを覚えてます。

なぜ、こんなに錯視図が生産されたのでしょうか？あるいはなぜ人は錯視図を作り続けたのか？と問いたいわけです。そして、心理学史をやっているおかげで、こうしたことへの答えが見いだせるようになったのは個人的にうれしいことです。

おそらく、その当時において錯視が問題になったのは「知識が正しい感覚を導かないのはなぜか？」、そういうことが問題になったらしいのです。たとえばミュラーリヤー錯視では同じ長さだということは知識ではわかっているのに、感覚的には上の方が長く見えてしまう。見え方は同じ長さに訂正されない。羽をつけたら上の方が長く見える、つまり錯覚だという知識はあるが、それが感覚に及ばない。そもそもそれがなぜ問題なのかというと、西洋の人たちはこれまで自分たちは理性的な存在だと思っていて、理性、知識が重要だと考えていた。一方で大航海時代を経て

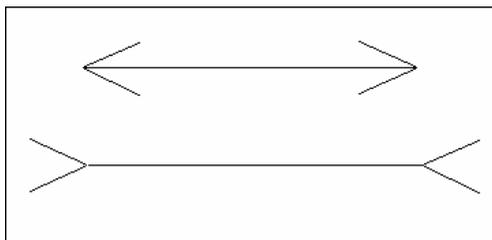


図1 ミュラーリヤー錯視(通称=矢羽根錯視)

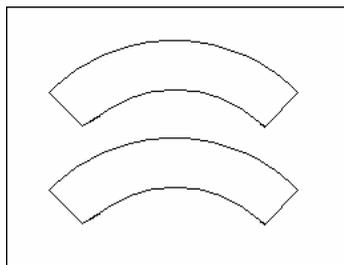


図2 ジャストロー錯視(バウムクーヘン錯視)

植民地が増え、現地の人と自分たちの違いは「理性」の違いだと思っていたのに、自分たちでも、理性や知識が感覚を正しく導かないことがデモンストレーションされてしまった。そういうことからこの問題に関心が向き、そうした現象の解明のために心理学で錯視図が過剰になったのではないかと思います。

1 - 2 学融領域として成立した心理学

ここまで、「心理学では・・・」のような言い方をしてきました。あたかも心理学というものはずっと前からあったような言い草です。しかし、実際には、心理学というのは19世紀半ば頃に装い新たに誕生した学問だったのです。それ以前にも心理学というものはありましたが、それは独立の学問とは言えませんでした。

ここで、心理学の成立について「学融」という概念から考えてみようと思います。学融はトランスディシプリナリティの訳でして、トランスを「融合」の「融」と訳そうという提唱をしているわけです。トランスパーソナルなんて分野がカタカナ表記になっていたりしますが、このトランスについても「融合」と訳した方が、いろんなことが見えるだろうと思います。学際のインター(inter)ではなくトランス(trans)は融合だという発想です。酩酊の意味の「トランスする」はtranceで違う単語ですので、ご注意ください。

心理学は精神を扱う科学として、哲学と科学の学融領域として成立したと言えるかもしれません。

ただし19世紀末、哲学とか科学が学問として独立していたと思う見方自体が間違っているという話があって「そんなに明確に分かれていなかったはずだ」と批判を受けています。この批判はつまりこういうことです。今からみると哲学とか科学は確固としたものとあったように見えるけれど、19世紀末の時点でそうだったかどうかは疑問である。

しかしこのような批判があることは承知したうえで、心理学が哲学と科学の学融領域だと考えることには一定の意味があるのではないかと考えています。

では科学とは何か。

科学についての考え方は多様ですが、教典主義、思索主義とは異なるという点での経験主義ととらえておきたいと思います。この問題、後で質的方法に関して、非科学性という批判が出てくる時、科学というもののとらえ方が違っていると、誤る可能性があるし、余計な批判を背負わなければいけないので、そもそも科学とは何かという理解をしておく必要がある。科学の語源は「知る」ということです。知るとはどういうことか。キリスト教的な世界では、ある時期までは聖書に書いてあることが真実である、聖書にどう書かれているかを知ることが重要だということでしたが、自分で調べることによって知識を増やすことが科学であるわけです。経験主義的観察に尽きるのだと思います。ちなみに、実験は観察の特殊な形態です。自分で条件を整えることができる、コントロールできる場合、ある条件で観察する特殊な経験が実験であると。

(いかにもウソっぽい)逸話があるのでそれをお話ししましょう。中世、馬の歯は何本かということが問題になったときの話です。実証主義が徹底する以前は、聖書を読んで調べることになります。聖書を読むといろんな表現が出てきてきますが、その中から馬のことを書いてある部分を解釈によって同定するのです。この部分こそが馬のことを書いてあり、そこには歯の本数が何本だと出ている、そういうことを解釈で見いだすわけです。もちろんこうした解釈には揺れがあります。そこで論争がおきたりします。ある人は聖書のある部分で馬の歯の本数を言っていると言い、ある人は20本、他の人はそういう読み方は正しくないといって聖書を他の見方で見て、この部分こそ馬の歯の部分だと。馬の歯の本数に確定するための解釈学的アプローチ、というとカッコいいですが、こういう追求の仕方があったわけです。そこである人が「馬の歯を開けて数えよう」と言ったら、「馬の歯の本数は教会が決めるんだ」と言って怒られたという逸話があります。自分で見て知識を増やすのではなく、すでに真実は聖書の中に書かれているというスタンスです。そうした世界と比べるなら、科学はやはりそういうものに対するアンチテーゼだと言えるかもしれません。だからこそ21世紀の今日に至るまで、キリスト教と科学の間に人間の起源を巡る見解に関して一定の緊張関係があるわけです。

では、心理学はその展開過程で精神の問題をどのように扱い、どのように解こうとしたのでしょうか。

たとえばメンタルテストというのがあります。原語は mental test ですから精神をテストするということです。ある意味で心理学にとって正統的な研究テーマだったわけです。19世紀末から20世紀初頭にかけて、多くの心理学者が精神を客観的に捉えるという課題に身を捧げていました。精神を科学的にとらえる検査、メンタルテストは心理学にとって大きな課題であり、その成果は大きな業績だったわけです。結果的にはフランスのビネが有用な検査を作り、それがその後でいろいろと不幸な展開をするわけですが、精神を科学的にとらえるという心理学自体がもつひな型というか範型がメンタルテストにまとまっていったわけです。

今、科学的とか客観的とかがごちゃごちゃと出てきましたが、要は、実験をやって数値で表すのが客観的であり科学的、と捉えられるようなところがあったということです。メンタルテストは精神の問題を客観的に捉える端緒を開いたという意味で、20世紀前半の心理学における希望の星だったのです。科学とは何か、というのは難しい問題です。たとえば男の人が男とは何か？と問われても自分のことだけでは答えられない。日本人が日本人とは何かと問われても答えられないことがある。だけど、外から見てるとそれなりに答えられたりしますその答えが「必要にして十分か」どうかは別として、ですが。ひとつたとえ話のような学問の話をしてみましょう。

エスノメソドロジーに「アグネスの研究」と呼ばれるものがあります。エスノメソドロジーの創始者であるガーフィンケルがアグネスという「女性」について研究したものです。簡単に言うと、トランス・セクシャルな方の研究です（ここでもトランスを融と訳すことを提唱したいですが、とりあえずカタカナ表記にしておきます）。生物学的に男ではあるけれど、女性として生きようとする人の話です。そういう方が女装をして人前に立つようになると、最初は化粧も念入りだし非常に女っぽい行動や言動をするそうです。それはなぜかという、自分が女じゃないことがわかっているし、自信がないから、典型的な女性的行動を学びそれを実践していくのです。いわゆる「ゲイバー」にいくと典型的な女性がいるのはそういう理由です。実際の女性がそういうところで（生物学的に男性の）「ホステス」に会うとショックを受ける。自分より女らしい男の人がいる・・・と。しかしそれは話が逆なので

す、男だからこそ、女の典型的な行動をせざるを得ないのです。人から女性だと思われたいと自信が持てないのです。

科学的であろう、という気持ちやスタンスも同じかもしれませんが。自分たちが何かを科学だと思う時、科学のエッセンスは何だろうと考える。そこから抽出した「科学の典型性」のようなものを装うことによって「心理学は科学だ」と思われるので安心、ということがあったのではないのでしょうか。おそらくそれは実験的手続き、結果の数値化というものであったと思われます。

ちなみに「アグネスの研究」的には、20年～30年たった方は化粧などせずに髭を生やして「あーら、何言ってんの、これでも私、れっきとした女なのよ」ということになっていく（比喩的表現です）。自分の中で自分が女だということが自覚できるから、外見はどうであろうが、人から「汚いおじさん」と見られようが、自分の女性性は揺るがないわけです。

例が適切かどうかわかりませんが、科学的であろうとすることをめぐって、初期の心理学には似たような展開があったと考えることにはそれほど無理がないと思われます。

もっとも、心理学の中でも（すぐに実験に訴えるのではなく）地道な観察、文脈的な観察を行うべきだという主張はあり続けました。「臨床的観察」と呼ばれる一群の領域です。クリニカルリサーチというと、今ではセラピューティカル、つまり、治す、ケアするということが中心という感じがしますが、もともとクリニカルというのはそういう意味ではありません。クリニカルは（治療的というよりは）臨場的（臨床的ではなく）と訳したいと私は考えます。

クリニカルという概念を心理学に位置づけたのはウィトマーという人で、彼は最初の臨床心理学者と言われています。ドイツのヴントのもとで研究して帰国し、アメリカでサイコロジカル＝クリニックをつくった人です。この人はなぜ clinical という言葉を使ったのでしょうか。

ウィトマーという人は今の言葉で言うなら学習障害に関わっていた人です。その中でも、子どもが字を読めないという読字障害の子どもの事例です。そういう子どもを、思索的に見るのではなく、教育学の教科書やキリスト教の教典を見て、かかわるのではなく、あるいは実験心理学の成果をぶつけるのでもなく、子どもがどう

いうふうに行っているかを実際に見るべきだと言ってクリニカルであるべきだ、としたのです。本人の言葉を引用すれば、「医学において clinical は、単に場所を示す言葉ではなく、それ以前の哲学的・説教的な医学から脱却する時の方法を示していた」ということであり、学校で学習障害にかかわる心理学者たちもそのような意味でクリニカルであるべきだ、と考えたのでしょう（サトウ・高砂、2003）。

クリニカルという発想は最初医学で始まりました。その意味で clinical が臨床と訳されるのは適切です。ただ、クリニカルを医学以外で使うとすると臨床でいいのか、という疑問も出てきます。私としては「臨場的」とか「対面的」訳した方が間違いはないと思います。臨場対面的なんてのもいいかもしれない。最近、医学や心理学以外にも、臨床哲学、臨床教育学などという語を見かけます。臨床政治学を専門にしているという記述を見かけたこともあります。いつまでも「床」という言葉にしがみつかず適切な訳語を作るべきときに来ているでしょう。くり返しますが、本来のウィトマーの発想からすると clinical は「場に臨む」という意味であるわけです。

心理学においてもセラピー的ではなくてクリニカルな研究はある。それを臨床と訳すと変な感じがしてしまうような、でも、クリニカルな研究です。

その代表者はピアジェです。彼の研究を簡単に話すのは難しいけれど、たとえば、子どもにおける「保存の成立」の研究。子どもは細長い円筒型のコップに入っている水を、平皿に移すと「水が減った」と思う時期がある。それをピアジェは子どもの実際の子どもの有様を確かめた上で、理論的に精神的発達について考えようとした。単純に言うと、子どもはある時期まで「量」の概念を体積としてとらえられなくて、たとえば高さという次元だけでしかとらえられない。だから、平皿に移すと減ったと思ってしまう。そこには量の保存が成立していない、ということになるわけです。わが子とその育つ場で観察しつづけた姿勢はまさにクリニカル＝臨場対面的なものでした（もっとも、ピアジェとその業績が傑出しているのはそこから仮説や理論を構築していったことにあるのですが、ここでは触れません）。

1 - 3 心理学のジレンマ

心理学は成立時に科学として成立したのですが、科学ということを狭くとらえる傾向がありました。根本的な問題として、「精神」という心の内部を対象にするという課題設定のあり方自体の問題があります。そもそも見えないものをどのように研究するかということで、心理学者はしのぎを削ってやってきたわけです。しかし20世紀半ばごろになって、日本の心理学、世界の心理学は、「曖昧なところは切り捨てて研究できるところをやっていればいいのか」という反省点が出てきました。先ほど紹介したピアジェがうまくいったのはお子様の、しかも認知機能の研究だったからという面もあります。お子様は生活の文脈が限られていることもあって、文脈ごと丸抱えにして外から見ることができる、だからうまくいった。いい大人を捕まえて3時間くらい拘束して水が増えたとか、減ったとか、やってられない。私が大学2年生の時、実験実習で大人相手に知能検査をしなければいけないことがあり、知能検査を高校時代の同級生にやったら（そのときは協力してくれたけど）後で怒られました。2時間も拘束してあんなことさせて、と。大人を相手にしたクリニカル＝臨場対面的な研究はやはり難しい。

だからといって、やれるところだけやっていたらいいのか、という問題が出てくるわけです。

社会や発達における心理学領域で実際の生活上のことも扱うようにすべきではないか、という声が大きくなってきました。もちろん、こういう課題設定は心理学だけのものではない。実際の生活上のことも扱うように方法を設定すべきではないかというのは、心理、社会、教育に共通していると思います。看護もそうです。しかし、教育学は基本的には教育とは何かを追求する学問であり、社会学でも同様に、ジンメルとか学者の理論を研究して、そこから自らの社会についての理論をつくる。理論をつくって社会を研究することが重要だ、だから理論化について研究しようということが多いわけです。看護であれば生活のことを調べる前に、注射や点滴のような技術をしっかりしてほしい、ということがあります。

1 - 4 心理学が生活上のことを扱うために必要なこと

さて、生活上のことを扱う時には、いろんな枠組みを変えていくということにならざるを得ません。研究という言葉を使うと研究と実践の二分法になり、しかもそれが優劣で語られてしまいがちなので（研究が優で実践が劣）、「新しい知識の生産」だというように設定しようというのがモード論の考え方です。もともとはギボンズ（ギボンズ他、1994）という人の科学社会学的な理論ですが、私はそれを心理学に適用してみました。その考えは拙共著『心理学論の誕生』（サトウ・渡邊・尾見、2000）などで読むことができます。

研究もしくは実践に有用な知識を生産することが私たちの目的であって、そこには研究と実践の大きな区別はない。「学範（ディシプリン）主導のモード」と「実践主導のモード」があるにすぎない。2002年に日本人がとったノーベル賞はそれをよく示しているという説があって、モード論者が好む物言いですが、小柴さんがやった理論物理学はモード論でいうところのモードです。こうすればこうなるはずだからと岐阜県にカミオカンデという実験施設をつくると言い、国から予算を持ってきて観測をしたらうまくいった。学範主導、理論主導です。一方の田中さんはタンパク質の分析、こうすればタンパク質が見えるということ測定機械として形にして、その機械が普及して多くの発見を生み出した。これはモード論でいうところのモードです。田中さんは世界でも日本でも知られてなかった。機械は発展していったけれど、その元の考えを作った人のことは誰も知らなかったわけです。ノーベル賞かできてから博士号を持っていない（自然科学系の）受賞者は初めてか二人目だというくらいです。ノーベル賞は1901年にできたわけですが、それまでに学位制度はしっかりできていましたので、ほとんどの受賞者は博士号を持っている。田中さんの場合、企業の現場で実践している人が、ある目的のためにつくったものがどんどん発展した。まさにモードと言えます。こういうことを心理学でも考えることができないかということです。

実際に生活における人間（の心理）について考える時、量で迫る方法、質で迫る方法がある。心理学の枠組みにはどういうものがあるか。たとえば、図3のような矢羽根の錯視ではA B間とC D間でどれくらい違うかは聞かない（実際はおなじ長

さ)。そうではなく同じに見える点をつくって、同じに見える点（主観的等価点）は実際には何センチ短いか、などと追いつめていく。角度を変えて60度の時はこう、30度の時は3センチ短く見えるということで、数字同士の関係に置き換えるわけです。意味を捨象しているし、結果が数字なので四則演算ができる（ように見える）。だからこそ法則性を捉えやすくする。これはこれで優れた方法なのだから、機会があれば使うべきだと思います、いろんな意味で。

普通なら、こういう図形 - 先ほどの図1と同じような図ですが - を見ると、A B間とC D間で「どれくらい違うと思う？」と聞いちゃうわけです。それにはいろんな答え方があって整理が難しくなります。「ちょっと長い」とか「3mmくらい長い」とか、個人個人の経験がそのまま出てくると、それをまとめるのが難しくなっています。逆に言うと、心理学は数値化する道を選んだので発展した部分があります。だから、量的研究とは異なって質的研究を進めていくとしたら（今、ここで比喩的に言うなら）「ABが個々人にとってどれくらい長く見えるのか？」という問い方をしてその見え方を理解していく道をとろう、と言っていることになります。

個人個人に迫るために質的な理解というのが重要になってくるなら、それは心理学がこれまでに用いてきた方法とはやや性質を異にするものなのであり、そのための方法論を考える必要があります（もちろん、そうはいつでも実証的であるとか、いくつかの点では共通の土壌の上にあることもまた重要な事実です）。

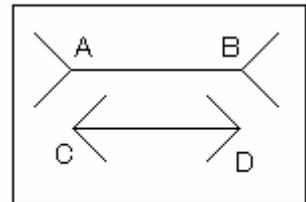


図3 ミュラーリヤー錯視図の比較

2 質的研究とは何か

2 - 1 質的な経験と質的な研究と

心理学において質的研究が重要だという認識に立ったうえで、そういう研究をするにはどうすればいいかという問題設定をした場合には、まず心理学という学問の持つパラダイムを考える必要があるでしょう。これは既に見た通りで、心理学は人間を狭い意味での科学で扱おうとして、それで扱えない現象はむしろ扱わないという感じになりがちでした。

しかし生活の中の人間を扱いたいという時には、それはやはり狭い。そこで、新しい方法の整備が必要になるわけです。心理学がめざした科学を狭い科学ではなくもう少し開くようにしてやるわけです。それはどういうものかといえば、質的研究です。そこで最初に質的研究について考えてみましょう。

最初に「質的な経験」ということを考えてみたいと思います。『心理学の新しい形』の中で書いたことと重なりますが（佐藤、2002）、私としても割と気に入っているものです。

「本当の空がある」といった人がいます。

どこで？だれが？どのように？

詩人・高村光太郎の妻の智恵子。生まれ故郷の福島県の二本松で言った。

こういう話を聞いてみて、それで何かをやってみるとして、やって楽しいことの1つは、その当時の天気を調べてこんな色だったなどと智恵子が見た（だろう）空を復元してみることです。でも、そういうことを通じて智恵子が「本当の空」と言ったことを了解できるだろうかといえばそれは違うでしょう。

ではどのようにすれば了解できるようになるのか。その際、徒手空拳では無理で、原資（リソース）が必要になります。何をリソースにして智恵子の発言に迫れば良いでしょうか。

心理学における質的研究の伝統です。

社会心理学におけるフィールドワーク。発達心理学における日誌観察法。現象学的心理学。現象学的心理学は私には難しい世界で、ある女の子が泣いた5分間のことを一冊の本にして書いたものがあったような気がします。いずれにせよ、こういうものを原資にしながらかえていくわけです。

2 - 2 質的な研究とは何か

質的研究とは何かということについて、能智さん（2001）はこう言っています。「扱われるデータと結果の表示が質的であること」。Miles and Huberman（1984）は「言葉の形式によって表されたもの」と言っています。澤田さんと南さん（2001）は「言葉に限定せず、図や映像、音声など、事物も出来事の様態を写したり記したりしたもの全般」と言っています。

このような引用でわかることの一つは、数式と数字で結果を表すのではなく、主として言葉で、あるいは図像で表すということです。ちなみに化学の質的分析と心理学の質的分析はどう違うか。化学の質的分析の良い例はリトマス試験紙です。試験紙を浸すことによって赤になると酸性、青になるとアルカリ性、媒体が質的に変化したことによって分析することが質的分析です。ある媒体の質の変化によって、知りたいものの性質を知ろうとするのが化学における質的分析です。心理学の質的分析とは違うわけです。心理学における質的分析は言葉、映像によって表現することを志向しています。

では、心理学における質的分析はどういうふうを考えるべきでしょうか。澤田・南のおふたりが言っていることは「体験を記述し、そこに含まれる成分、構成要素を明らかにし、他の類似の体験との関係において、この体験の特質・特徴を浮きだたせるところにある」ということです。「本当の空」と言った智恵子の例に照らしれば、空の色の周波数分析をしたり、他の場所の空の色との異動を比較したりするのではなく、「本当の空」は誰と一緒にいたか、本人はどういう状態だったかを考えます。あるいは智恵子が故郷にいない時の状態はどうだったのか。さまざまなことを明らかにしていくことが「本当の空」を理解することにつながっていくわけです。「本当の空」と言った時に智恵子の経験、そしてそれはどういう経験と似ているのか、あるいはどういう見解と違うのかを理解する必要があります。空の色の周波数分析によって再現するのではなく、文脈の再構築によって「本当の空」の意味を浮かびあがらせるべきだということが言えるわけです。

質的研究の特徴について、澤田・南のおふたりと能智さんは下表のように整理しています。

表1 質的研究の特徴（澤田・南、2001；能智、2001）

澤田・南（2001）	能智（2001）
帰納的	自然な状況でのデータ収集
対象となる事態と人々を全体的に見ていく	プロセスに対する注目
研究者自身が対象に与える影響に敏感である	帰納的な分析
対象者の視点から相手を理解しようと努める	意味への関心
研究者の信念、視点、事前の前提をいったん保留する	

ちなみに、ここで今気になっているのが帰納法ということです。帰納法。

数学的帰納法という高校生の時の数学のことがアタマに浮かぶわけです。詳細の説明はここでは省きますが、こういう発想を心理学の帰納法にも使えないかと考えていて、雲を掴むような話ですが……。数字ってのは一般に、数式の定義の明瞭性、数字自体がもつ規則性に負っているところが大きいので、過度な期待は禁物ですが、心理学でもそういうことでできないかと考え始めている最中です。

2 - 3 質的研究への批判に答える

2 - 3 - 1 非難は無視し、批判には制度的に答えよう

さて、質的研究に限ったことではないですが、方法論に対する批判が行われることがあります。それらをいくつか見た上で必要なら反論してみたいと思います。

資料を読み込んで、解釈枠組みをつくり説明を試みるプロセスですから、よく言われるのは「客観的ではない」ということ。私の立場からすると、この手の批判は、客観的かどうかということが問題にはなっておらず、むしろ「独断的だ」ということが非難されているのだと思います。研究者と対象者の関係においてどちらかが権力的になってしまうとか、表面的に分かったつもりになることがあるとしたら、それは確かに問題ですから、それについてはコントロール（制御）をしていく必要があるでしょう。「独断的、独善的傾向を避けなければいけない」ということは確かに考慮されなければいけません。

ただし、間違いを恐れる必要はない。間違いはどんな学問にもあります。ただ、間違いを防ぐ手だてが制度的に整っていないとすればそれは問題です。私たちは（小学生の）夏休みの自由研究をやっているわけではないので、一生懸命やってみただけれど全くウソでしたということではすまない。あるいは、自分がやったことは全く間違いの可能性がないと豪語することもできない。どれくらい間違っている可能性があるか、それをどう組織的に防げるか、ということに関して努力をすべきなのです。ある研究について「独断的だ」と言われたことに対して、その研究者が個人的に答える必要はありません。荷が重すぎる問題です。しかし、誰も答ええないということでは困る。制度的にどうにかしなければいけない問題だと思います。

もちろん、不当な言いがかりには反論する必要があります。（批判は傾聴し時には受け入れることがあってもよいが）非難には屈してはダメで反論しなければいけません。「質的研究は信頼がおけない」「解釈が入っている」は批判と非難の間。「データが偏っているのではないか」「曖昧なものから曖昧なものを見て何がわかるか」というようなものになると非難に近い。「ごみからはごみしか出ない」という言い方をするようだとこれはもう批判というより非難です。ただし、こういう非難には「ごみから家庭の状況がわかるからいいではないか」という切り返しもできませんが。

質的な研究の結果は「いいとこ取り」ではないか、というような批判も起きる。最初から分かっていることを取り出しているにすぎないのではないか、という批判と

も重なります。そういう批判が出てくることはよくわかります。しかし一つ重要なことは、こういう批判は質的研究だけに起きる根拠はないということ。どんな研究にだってある。もちろん、「質的研究だけに起きるのではないから」という反論は開き直りで、実際にどうするかを考えていかなければいけないわけです。

そこで以下でどうしたらいいか考えてみたいと思います（こうした思考こそ方法的な思考なのです）。

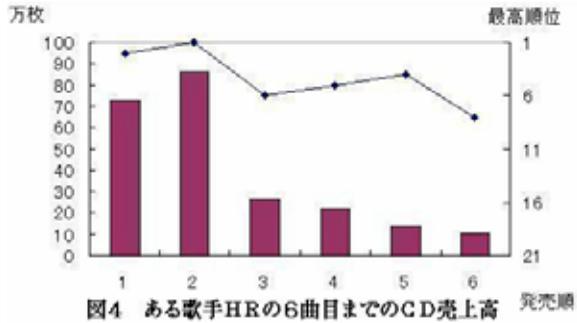
私は第一に「理論的な記述」を大事にすべきだと思います。事実を普遍的なものにするための理論をしっかり立てる。第二に「第一の過誤の低減方策の確立」。これは必要だと思います。第三は「評価システムの構築」。この3つです。こういうことをすることによって、批判に対して反論していく必要がある。開き直りではなく反論していくことが重要です。

2 - 3 - 2 理論的な記述

理論は、抽象的な記述です。幼稚園で子どもが何かをしている。記述するにはそこには理論が入っている。どういうカテゴリーで書くのか、すでに理論は入っている。ある現象を喧嘩と記述するか、じゃれあいと記述するか。はたまた所有権をめぐる葛藤と記述するか。全然違う。2004年に立命館大学の客員教授として来日したヤーンことヴァルシナーさんは「データをして語らしめよ、などという人がいるけれど、データが語るはずがない」と言ってますが(Valsiner, 2001)、それも同じことをさせています。記述自体が概念付加的だということを自覚する必要があるし、それも含めて「記述・概念・仮説・理論」ということに自覚的になる必要があります。そして、そのために「分厚い記述」を心掛ける必要があるし、キレのいいカテゴリーを作成する必要があります。

仮説ということについては、「生成」もしくは「継承」していくことが大事です。仮説「生成」はやまだようこさんがよく言いますが、「継承」は西条剛央さんがよく言うことです（たとえば西条、2003）。個人ではなく仮説自体を継承していく。検証ではなく生成と継承をやっていく。「理論」をつくるもしくは組み込む。

事例（一人の人のあること）を取り扱った研究で「その人のあること（だけ）がわかりました」というのでは学問としては寂しい。それを広げるために理論が大事になります。



「キレのいい概念」とは何か。たとえばHRという歌手のCDがどれくらい売れたか。この図は6曲目までの売り上げ（棒グラフ）とチャートの最高順位（折れ線）を示したものです。これをどういふに見るか。一般には3曲目に突然人気が無くなったということでおしまいでしょう。でも、ここで「普及」という概念を知ると違う見方ができる。この歌手は1曲目から2曲目にかけて普及が見られる。そして、普及というのは上りだけで終わることはあり得ないので、その後、普及の宿命として売り上げがおちている。その落差が大きいし、2度目の普及がない、ということが特徴になるわけです。

また、HRという歌手は普及したのだけれど、他の歌手はどうだろうか。普及という概念を通して見てみると、たいていの歌手は1曲目がピークで売り上げが伸びることはないことが分かります。落ちていく。つまり普及していないのです。そういうことが分かってきます。さらに、普及という概念を使うことによって他の概念たとえば「噂」がどう広がるかを考えることともつながるのです。ネズミ講の広がりともつながるかもしれません。概念の「普及」ということを考えれば心理学史や科学史にもつながっていきます。具体的な現象をキレのいい概念で見ることができると、いろんなことが見えてくるものです。

2 - 3 - 3 誤りの二つのタイプと第一の錯誤の低減

方法論的な留意点の2つ目は「第一の錯誤の低減」です。これは重要です。研究は誤らない方がいい。誤りはなくした方がいいに決まっている。よく言われるのは「第一種の過誤 = 慌て者の誤り」と「第二種の過誤 = ボンヤリ者の誤り」。実際に

「差がないのにある」と言う誤りと「あるのにない」という誤り。男の子と女の子の二人がいるとします。道行く人すべてが「私に気があるかも」と思うのが「慌て者の誤り」で「相手にその気があるのに、無いよきっと」と思うのが「ボンヤリ者の誤り」です。「何とか君があなたのことが好きだよ」「そんなことないよ」と言っただけの子にとられたのが「ボンヤリの誤り」で「あいつ俺にホレてるぜ」と勝手に思うのが「慌て者の誤り」です。判断の誤りには大きく分けて2種類あることを知ることこそが重要です。

さて、学問がどっちを統制すべきか。「ないものをある」といってしまう誤りの方が問題で「第一種の過誤」をコントロールする必要があると私は思います。

血液型性格判断の例で考えてみましょう。個人的なことですが、私はネット上で、血液型と性格の関係を認めない頑迷な心理学者として非難されていたりします。

「海外で多少研究があるのに意図的に無視している」とか「サトウが少数者差別（ブラッドタイプハラメント）をつくりだしている」という批判もいただいています。しかし、「ないものをある」という過ちと「あるものをない」という過ちとどっちがいいか。「あるものをない」と言う過ちの方がいいわけです。もし本当にあるとわかったら、その時に「ごめんなさい」と言えればいい。逆は通じないわけで「ないものをある」と言ってしまうと、保育園で血液型別保育をやってしまっていたら、「やっぱり間違っていました、ごめんなさい」というわけにいかない。そういう意味で、慌て者の誤り、つまり「第一種の過誤」をどうコントロールするか重要な問題だと思います。

統計的検定のロジックは、まさにこれです。有意確率などを用いて帰無仮説棄却の基準を5%にしたりするのはこういうロジックです。1つの研究で検定を20回やったらどうなのか、100回やったらどうなのかという部分もありますが、なぜ統計的検定が第一種の過誤にこだわっているのかということは知っておく必要があります。その良いところは私たちも見習わなければいけないでしょう。

2 - 3 - 4 評価の蓄積で誤りを低減する

評価の蓄積で誤りを低減するためには、単一の評価ではなく複合的な評価をすることが大事です。

まず研究仲間による評価。ゼミの中の討論でもいいし、質的研究評価研究会とかをやって討論することもいいでしょう。ただし、これには仲間同士の信頼関係が重要で、しっかり批判できる関係がもてているかどうかが大事成ってきます。

その他にメンター（・教師）による評価。つまり、指導者による評価も大事で、教師が学生の論文を批判することは大事です。評価と言いたいところだけど、ここはダメ、あそこダメ、という具合に多くの場合批判になってしまうかもしれません。しかしそれでもやはり有効です。なぜかと言えば多くの場合、メンターの人の方が理論、方法論を知っているからです。

さらに、当事者による評価があります。ただ、フィールドワークや面接調査に基づく研究を当事者に見てもらったときに、本人が納得するのがいいのかどうかは、議論が分かれるところです。当事者がわからないことを書いてしまって、怒りを引き起こすこともあり得るからです。ある人が「修士論文の時は、現場の人が喜ばないことでも書くくらい姿勢が大事だと思っていたけれど、その後は、書いたものを現場の人に見せられないようではフィールドワークと言えないのではないかと考えが変わった」と言っていたことがあります。つまり、個人でも考え方は変わるので、当事者の方の評価の問題は難しい問題です。一方、単なる代弁者では何のために研究者が研究しているのかわからないと考えている人もいます。私自身としては、当事者に見せる事が必要なことは認めますが、その内容が常に当事者の方から承認される必要はないと考えています（佐藤、2004の冒頭座談会「ボトムアップで行こう」も参照）。

レフリー付き雑誌による評価。レフリー付き雑誌に掲載されるということ自体、実は評価されたということです。複数の人、それもその道のプロが読むわけですから。学会誌であれば学会の評価も受けたということになります。さらに学会で賞を制定していてそれを受賞すればそれは大きな評価になります。

以上、誤りを防ぐということを見から見る、つまり評価という側面から見ることもできることを示してみました。評価を多重に行うことで、制度的に研究の過誤を防ぐことができるという視点は質的研究にとって非常に重要だと思います。

2 - 4 量的研究の研究評価とは異なる評価をしても良い

2 - 4 - 1 信頼性・妥当性概念の検討

私たちはどうしても「妥当性・信頼性」という用語を使って研究の評価をしようとしてしまいますがそれでいいのでしょうか？私は最近、妥当性・信頼性という概念を使っていることではダメだ、(量的研究ワールドに)絡め取られてしまう、という感じがしています。

質的研究の「第一種の過誤を低減する」というときに妥当性、信頼性の概念を使っているのは結局のところ何も変わらないのではないだろうか、と思うわけです。特に、心理学における信頼性という概念は特殊な概念で、定量的測定にとって重要なんです。量的研究にとって「のみ」と言ってもいいかもしれない。信頼性の無いところに妥当性は存在しない。毎回測定値が変わるのに妥当性など言っても仕方ない、と言えなくもない。しかし、心理学における測定は長さを測るようなものではありません。そこで信頼性が「増殖」しているのです。たとえば折半法。一つの尺度を半分ずつやって相関関係を見る。そもそも半分に分けて測定しようってところが変でしょ！という突っ込みは入らない。再検査信頼性なんてのもおかしいといえばおかしい。2時点の測定値が安定しているということを指標にする。しかも相関係数だから、絶対値としては変動していてもいい。ここでは2週間後にやってみてどれくらい結果が一致しているかという変化を捉えようとしなないわけです。今日やった測定と2週間後の測定の相関で信頼性をみるというのは、変化を見ないことを前提にしているわけです、相関係数は変化をとらえられない、のです。

そもそも相関係数を使うとはどういうことでしょうか。相関係数を用いて何かをする。変化は誤差になっていますから変化を扱わない。ガルトンが「相関」とか「回帰」の概念をつくった時、相関の概念は「遺伝主義的」で「変化否定的」なものです。変化は誤差だと考えるわけですから、人の変化や成長を測定法でとらえようという時、信頼性という指標を考えてはいけなく個人的に思うわけです。信頼性はそもそも相関係数がベースですから。こういう極端な議論をしていていいのかということですが、本学先端科学研究科所属の某先生という哲学者の話を書くようになって「極端な議論を考えてみるのは学者の役目だ」と思うようになったので、極端に話をして見えています。極端に考えるとそういうことなんです。

妥当性という概念もそうで特に質問紙尺度における「構成概念妥当性」「併存妥当性」などは、ある種、自己撞着的な話でしかないわけです。「不安尺度、抑鬱尺度の相関が高かったから不安尺度に妥当性がある」という話で「新しい不安尺度をつくった」と。「抑鬱尺度と相関をとったら0.5だから妥当性がある」ということを言う。これはおかしいわけです。今帯広畜産大にいる（友だちの）渡邊芳之さんは「尺度の相関係数を出す前に、尺度間で同じ単語が何個使われているかを調べたい。同じ単語が使われているほど相関が高くなるからデータをとる必要はない」と喝破したことがあります。尺度の項目自体が著しく類似しているわけで、そういうものは妥当性と言えないのかもしれない。

つまりここでは、心理学における信頼性・妥当性概念は量的研究をベースにしたもので、一般的な日常語としての信頼性・妥当性とは異なるということを言いたいのです。異なる概念で質的研究の評価なり質の担保なりをしていかなければいけないと思います。

個人的には再現可能性の提示と研究プロセスの明示、この二つだと思います。フィールドワークだからと言って、何でも自由にやればいいわけでもない。書く時にもお作法は必要です。でも、どうしても手続きを書いてくれない人がいる。「見えました」「話を聞きました」と。どういうふうになるのかを細かく書く。フィールドワークのプロセスでどういうふうになるのかを細かく書く必要があるわけです。

次に、もう少し広く、研究評価の広がりという観点から考えてみたいと思います。

2 - 4 - 2 評価概念の広がり

そういった意味で、質的研究では評価に関する概念を広げていく必要があります。いろんな人がやっていて、私のものがないとは思いませんし、私のやり方の問題は、心理学における量的研究の概念を超えようとして飛躍しすぎているくらいがあるところですが、それは置いておくとして（笑）、私は現時点でフィールドワーク、質的研究の批判に答えるときに、既に批判の中に使われている言葉を無自覚に受け入れて使用してはいけないという主張をするわけです。「客観性がないとか、あるとか」押し問答をしてもしょうがない。あるいは「自分が見たことは主観的にすぎない」と言ってもしょうがない。客観性という概念自体を問い直したり、そういう概念でやるんじゃないだということを言ってもいいということをお願いわけです。

西条さんの『質的心理学研究』第2号に載っている論文（西條、2003）は、もっと多様なところから概念を持ってきていますのでそれも参考にして、今ここでは以下のようにしてみたいと思います。

表2 評価概念の再検討（フリック、1995p292を参考）

従来概念	提唱したい概念	
客観性	再現可能性	反証可能性
信頼性	確実性（手堅さ）	監査可能性
内的妥当性	有意味性	真正性（迫真性でなく）
外的妥当性	転用可能性	一般化限定性

「客観性」ではなく「再現可能性」「反証可能性」。再現可能性については、手続きをしっかりと書くということ。「反証可能性」はどうしたら自分の意見の主張が

覆るか、ということ。先ほどの図の HR という歌手の楽曲の普及の例でもそうです。自分の考えとして「普及より、普及しない歌手の方が多い」という主張になれば、それは反証することができるわけです。普及という概念でSARSもわかるという話になれば、反証可能性をしっかりと出す。

「信頼性」ではなく「確実性（手堅さ）」、「監査可能性」。同じ結果が出るという話ではなく「確実性（手がたさ）」を重視したい。「監査可能性」というのはトレール（軌跡を追うということ）することができる。ある人が会計監査するように書類を見ることができるといことです。

「内的妥当性」に変えて「有意味性」「真正性」。「有意味性」は「あなたの研究はどういう意味があるの？」というようなことです。一人だけのことを聞いて何がわかった？というような問いに対して「有意味性」という概念を使ってみたい。自分の事例がどういう学問の文脈に位置づくのか、その意味を言わないといけない。自分が聞いたのは一人だけの話だけど、あるいは、見たのは一つの現場ではあるが、こういう意味があるとか、そういうことを言えるかどうかということです。おそらくそのためには理論が必要になるので、理論の話とつながるところです。「真正性」は、そのことに関してきっちりとらえられているということ。迫真性ということを重視する人がいるんですが、一応、噂とか目撃証言（の信憑性）の研究者なので（笑）迫真性という語は使いたくない。「迫真性があるよね、リアリティあるよね」と言う記憶や証言が必ずしも正しいとは限りません。また、「当たり屋が来ている」というチラシは迫真性があるとしても、実際には車ではなくチラシだけが来ている、ということがあります（佐藤、2001 など）。迫真性ということではなく、自分のあることでとらえていることが、ちゃんととらえていると証拠が出せる。オーセンティシティ。自分の研究にはどういう真正性があるかを語れるものでなければいけない。

「外的妥当性」に変えて「転用可能性」と「一般化限定性」。あるローカルな事例でわかったことが他に転用できるというのが「転用可能性」。ここまでは使えるという意味で限定をかけるのが「一般化限定性」。一人のことについてわかったことが、一人のことで終わると学問とは言わないわけで、何かに対して転用可能でな

いといけない。しかし「ここには当てはまりません」と理論的に限定して言う必要があるのであるわけです。

個人的に、今、重視しているのは「再現性概念」ですが、それをどう拡張して整備していくか。「手続き的再現性」「外挿的再現性」「臨場的再現性（ハイファイ性）」ということを考えてみたいと思います。

表3 再現性概念の拡張と整備（佐藤、2002）

手続き的再現性
外挿的再現性
臨場的再現性（ハイファイ性）

「手続き的再現性」は他者が同じことをできる手続きを詳細に書く。他の人が他の人の研究をやったら違ってあたりまえです。しかしそれにもかかわらず、どうやったかをしっかり書くべきだと思うわけです。

「外挿的再現性」は、あるプロセスまででつくった概念を用いて、それとは違うことをちゃんと説明できるかということです。最後の証拠（切り札）を保全しておくということ。ある地点まで観察していて、観察と同時にビデオテープをとっておいて、自分がつくった観察から用いた概念で、最後にある時、とっておいたビデオが説明できるかという扱い方。僕は箕浦康子さん（現・お茶の水女子大）に影響を受けたこともあって、最初から録画しておこうという姿勢はありません。社会心理学が扱うフィールドはビデオをとれる場所だけではないので。保育園や幼稚園の観察は親や管理者に頼めば録画はできますが、このこと自体がポリティクスの問題として扱われるべきでしょう。

録画を前提としないフィールドワークについて考えると、観察にいきメモをとり考える。さらに観察にいきメモをとり・・・の繰り返し。そして概念をつくる。人文社会系の学問においては、文脈適合的な概念の構築こそが仕事だと思うので、こうした作業は重要だと思います。自然科学的な意味での発見はできなくても、こう

いう発見は大事です。そして、こうした作業・格闘の末に見えてきた概念によって何が説明できるかということが問題になった時、過去にとっておいた画像記録で説明するというのは面白いと思います。つまり、常に録画するのではなく、観察期間中に随時何度か録画しておいて、最後に適用してみるのです。そういう意味で外挿的という言葉を使っています。これは親子関係鑑定で（最後に）血液型を調べるようなものです。戦争孤児の肉親探しの調査などでは、親子関係で血液型を最後に調べます。それが違ったとなると「最初にやってやれよ！」とか思うことがあるわけですが、最初にやるとおしまい、最後の最後にある程度信頼できる証拠を残しておくことが大事なのです。最初に客観的なデータを知ってしまうと、その結果に引きずられてしまいがちになります。それを防ぐために、最後の最後に自分の概念の適切性をテストできる場所をどこかに持っておく。これが外挿的な再現です。録画をとる以外にも、ある保育園で生成された概念を他の保育園での一回だけの観察で適応してみるとか、いろいろ工夫ができるでしょう。

「臨場的再現性」。その場にいるような感覚をもたらしような情報を用いた再現性です。ハイファイ性と言ってもいい。もちろん、これはその場にいない場合における「らしさ」の追求だということをしっかり頭に入れておく必要はあります。

教室の文化について考える時、たとえば教室にはどんな掲示が張られているか。ロッカーはあるか本棚はあるか、ものの配置などもしっかり書いておく。ビデオがある、ボードに何が張られているか。場所自体の書き込みをしていく。絵を描ける人は描く。絵を描くのがうまいひとはうらやましいですね。絵だと実際には複数の視点をもりこめるので、カメラでとった写真よりも臨場的再現性という点で優れていることが多いものです。

ある人間やその人の人生は他の人のそれと交換可能だということはありません。だからこそ、そうしたことを扱う場合には他のいろんな形で手続き上の再現性を確保していくことが大事だと思います。

2 - 4 - 3 質的研究の訓練

質的研究は名人芸的なものがある、といわれたりしますが、私は学問である以上、ある程度のトレーニングが可能だという立場にたっています。

だからこそ、「質的研究の訓練」が必要になる。では、どういうふうに訓練していけばいいのでしょうか。面接や観察の技術の訓練では、面接・観察を繰り返して、問いを洗練させる訓練を積むことが重要だと思います。箕浦さんの『フィールドワークの技法と実際（箕浦、1997）』には初期の訓練について載っています。私の場合はたとえば、テレビコマーシャル課題というものを初期に課しています。日常的に見るものを少し違う目で眺めてみる。そしてあるカテゴリーができる。それをもういっぺん壊してつくってみる。つくる、壊すという過程を何度かやってみることは重要な感じがします。

その他、横断歩道課題というものもあります。横断歩道の観察です。普通なら横断歩道は道路を渡る場所、ということになるが、たとえば横断歩道は待つ場所であるということが見えて来る場合がある。そうなると電車を待つのと横断歩道はどう違うか、などと考えが進んでいく。このように繰り返し訓練することをやっていくのです。

その際に「書いて発表する訓練」を交えながらやっていく。書くことは意外と重要です。考えていると、どんなことでも考えられる。一度にいろんなことを考えられる（ように思える）。どんなことでも結び付けられる。ところが、実際に書いてみると一度に書けることは決まってくるので態勢が整ってくる。少しずつでいいから書いていくことが重要です。

書いたら人前で発表する。これもやり方があるけど今回はスキップします。一つだけ、とにかく練習が大事です。

そして、発表をちゃんと批判されることも大事。しかしこれは難しい。私の場合は「人を褒める訓練」をします。批判の訓練も大事ですが、褒める訓練も大事だと思います。

褒める関係があつて、その上に批判がついてくる、そして批判を受け入れてよりよいものを作っていけば良いのだと思います。

アメリカの大学では(というのも紋切り型的表現ですが)、どんな質問があつても、まず「グレート」という話から始まります。日本では質問されると怒る人がいる。「なんでそんなことを答えないといけないのか」と非難する人がいたりする。自分が褒めてほしかったら人を褒める。日本心理学会で「いい研究をするにはどうすればいいか」ということをしゃべったことがあります。その時は「いい研究をするには人を褒める。それが回り回ってくるのだ」と言いました。いいネットワークを持つことも重要です。EQは実はエモーショナル・インテリジェンスという概念です(EQというのは日本の出版社がつけた愛称のようなもの)。いい業績を出せる人はどういう人か。日頃から対人関係をよくしている人だということです。自分が困った問題がある時、誰かが助けてくれる。すぐ助けてくれるということは普段からいろんな人を助けていたり、いい関係をつくっていることの現れなのです。だからある人が困っている時、助けてあげようということになる。困った時にいいアイデアをもらえる人が他者からブレークスルーを得ていい業績を上げられる。

質的研究に限ったことではないですが、褒める訓練する必要があると思います。

2 - 5 テクニカル・アドバイス

以下では、技術的なちょっとした工夫についていくつかお話しします。

2 - 5 - 1 テクニカル・アドバイス 初期

まず初期では「繰り返しの視聴」が重要です。現場に行くなら何度も行って何度もメモする。僕自身は録音、録画が常にいいという立場ではないので何度も観察しろということです。もちろん録音録画が全くダメというわけではない。もしそうしたなら、それを何度も見聞きすることが大事です。分野は違いますが、ロジャース

やベイトソンといった人たちは何度も同じことを聞いて、そこから自分なりの説を作っていました。記録テープなどは早まわしたり遅回ししてみたりするのも良いでしょう。

次に、「頻度の多いことには文化的意味がある」。これは私の師匠？である箕浦康子先生の言葉です。自分自身の例をいうと、その箕浦康子先生の授業のフィールドワークをしている時のことです。彼女はわりと予定のことを言う。最初はわからなかったけれど、繰り返されることは重要だ、という目で見えていくと、時間管理や見通しというのが大事だということが分かってきます。予定への言及は授業の一部というよりは業務連絡の一種ではないかと思いがちだけど、授業時間内に言われている以上は重要なんだと思うようにするのです。あと、これは大学院の方法論の授業でテレビコマーシャルについてやってもらった時のことです。これは「TVCMとは何かということを経験から組み立てる」という一種の訓練としてやっているものです。番組の宣伝がコマーシャルかどうかということが問題になった。

「今日の7時から何が始まる、見てくださいね！」みたいなことを多くの人はコマーシャルだとは思わずデータからカットしてしまいます。しかし、頻度が多いことは文化的意味があるわけで、番組宣伝はコマーシャルに入るんじゃないか、と考えるのです。すると違ったことが見えてきます。多いから、またか、と思うのではなくチェックする。また違うことが始まったかと思うのではなく、意味があるのだと思うことが重要です。

「固有の言い回し、表現があったらチェックする」。フィールドワークする時にはそういう言葉に馴染むことです。現場でありますよね、特殊な略語。最初は違和感があってもチェックしておいて、どういう意味かをさぐっていく。これはイントネーションなども大事で、現場の人と話す時に違和感なく使えるようになればフィールドワークの初期はクリア、ということになるかもしれません。この人はここにいて馴染みがあるなと思ってもらえます。

「違和感を大切に」。これは、自分自身をある種の測定器として考えてみるということです。違和感があるということは自分のそれまでの人生とその現場とが激しく交錯している証です。何がそれを生み出しているのか、を考えてみると良いでしょう。

2 - 5 - 2 テクニカル・アドバイス 中期

中期になると「仮説生成と仮説の組み直しを楽しむ」。これをやらないとだめで、最初の仮説のままでは何も見えていないということになります。保育園で人気にある子は誰か、ということに興味をもってフィールドに入ったとしても、その考えに固執してずっと2年間やっているのはだめなんです。そのテーマを考えたのはフィールドに入る前の自分であって、そういう考えで保育園という場所が何か動いていたりするわけではないのです。ですから、その現場においてもっと重要な概念があるんだというつもりで仮説を組み直していかないといけない。

ある時点まで観察するとある仮説ができる、そこに焦点を絞って観察などをやってみる。あるいはとったデータを見直してみる。

そうすると必ずその仮説は崩れてしまうものです。

焦点観察、仮説生成というけれど、実際には仮説崩壊している。ある箕浦ゼミの学生が「先生は仮説生成というけど自分たちにとっては仮説崩壊の方が実感できる」と言っていました。まさに名言です。そういう行きつ戻りつのプロセスは嫌になることもあるんですけど、そういうプロセスを楽しんでほしいと思います。

「中間レポート的なものを何度か書いていく」。書くことは大事です。考えは奔放に広がりますが、書くときはかならず一定の順序が生まれます。それを利用して秩序を作っていく。また、書き始めると仮説や考えがまたもやガラッと崩れますから、仮説生成のよいきっかけにもなります。

「多様な資料を活用する」。たとえば、保育園という制度自体がどうできているか。無認可とは何か、認可とは何かなんてことも含めて制度的な基盤を調べるわけです。同性愛の研究なら、日本における歴史的背景はどうか。保健室登校の研究なら、保健室というものがそもそもいつできたかなんてことを調べておく。あるいは多面的に理解するという意味では、保健室の壁に何が張られているか。生徒が入ってくる時、何と言いながら入ってくるか、なんてことを理解していくのが多様な資料の活用ということになります。

「雑談をすることが重要」。これは特にフィールドワークの場合の中期に当てはまります。観察でも面接でも面と向かって「インタビューさせてください」と言うと相手も身構えたりします。ご飯を食べたり、駅まで送ってあげたり、そういう何気ない会話の中で自分の疑問点をぶつけて回答を得ていく。フィールドワークでなくても、データを狭いものにしないで、いろいろと広げることをやっていくのが中期の課題です。

2 - 5 - 3 テクニカル・アドバイス 終期

終期の最大のヤマはもちろん執筆。書く時にどういうことが必要か。

「有意味性を訴えるために文献精読・引用を」。自分が見ている事例は、ある意味でマイストーリーにすぎません。その小さい物語をどういう大きい物語の中に位置づけるか。ある障害者の研究をしている時、目前の人にかかわっているという意味ではマイストーリーにすぎないのです。相手と二人で協働生成しているという言い方ができるとしても、書くということになれば結局はマイストーリー。それを位置づける大きな物語を3つくらい作らないといけない。3つというのは、論文の序論の部分の節立てを3つくらい、という意味です。

駅のホームでタバコを吸うとはどういうことか。パーソナルスペースという理論に位置づけることが必要になるかもしれない。いずれにせよ社会心理学っぽいテーマを見つけてきて、そこに位置づけないといけない。これが1つ目の大きな物語。フィールドワーク（やインタビュー）という方法についての物語が一つはあるのでとりあえず2つの大きな物語に自分の現象を位置づけることができます。2つの大きな物語をつくって、自分のデータには意味があると自分が訴えないといけない。タバコを吸っている場面をやりましたと言っても、その学問的意味はわかってもらいにくいわけで、それを説明する努力が必要。そうすることで「とるにたらない行動から人間の生命や行動を考える」ことが可能になります。駅でタバコを吸っていること、をただ記述して誰が理解してくれるか。やはり学問の世界とつなげる努力が必要なのです。

また、こうした大きな物語を書くときには、先行研究を引用することが必要です。引用するためには読むことが大事です。引用も評価の一種ということがありますから、敬意を表する。誰の論文も引用しないような論文は誰からも引用されず孤立することになります。

「サンプリング方法の記述で腰を引かない」こと。「事例に限られているから」「私が見たのはある1つの例ですから」と言わない。言うくらいなら書くなど。いきなり言い訳から始めるような人は結構いる。雑誌論文審査者の立場からすると、言い訳を書かないでしっかり理論武装するか、投稿をとりさげろかにしてくれと言いたい。自分で少数事例研究という方法を選び取っながら「わずか1例（あるいは数例）ですから、わからない」と言うならこちらとしては「そんなものを読ませるな」と怒りたくなります。サンプリングの問題は非常に大きな問題なので後で少し論じる機会があると思います。

「何が知識の増分なのかわかりやすく書く」。上二つとの関係があるのですが、ここまでの研究でわかっていたことがある、そして、他ならぬ私がある駅でタバコの吸い方を研究したことで何がわかったか、それを書くことが大事だし、そういうことが無いなら論文は書けないでしょう。新たに分かったことをここでは知識の増分と言ってるわけです。

「執筆時には生の声を埋め込む」。実は個人的にはあまり好きじゃないのですが、レフリーはこういうことを言う人が多い。歴史家は資料が出てくると、それを喜んで見せたりはしないんですね。それは素人のやることで、得られた資料をどう読み込むかが仕事です。人がどう語ったかは一次資料で、その生の声を出すことが説得力を増すとは私には思えないのですが、現在のトレンドということで紹介しておきます。多くのレフリーは生の声が必要だ、というようなことを言いますから。

2 - 6 サンプリングという考え方を巡って

サンプリングの偏りとかエラーということについて次に述べてみたいと思います。私は2000年の夏にベトナムで調査をしていましたが、それはベトナム人、中国人、

韓国人、日本人を対象にした調査の一環でした（山本他、2003）。ベトナムの心理学研究所でお世話になってお小遣いについての調査をしました。あるいは買い物場面の観察をしました。誰に面接するか。どこで観察するかが当然問題になります。今回は割と高階層な家でも面接をやらせてくれたし、経済的に低階層なところでも調査ができました。ところが、自分たちでそう思っている、この手の面接や観察を行うと、人数が少ない、サンプルが偏っているという批判が寄せられるわけです。

でも、そのサンプルは「偏っている」とか「エラーだ」つまり間違いだということを使う人は、なぜそう言えるのでしょうか。何かに対して、「エラーだ」と言えることはどういうことか、ということです。偏りを指摘する人には、対象抽出とは逆の論理が働いているわけです。批判する人の中に何かカテゴリーが出来ているのでしょうか、そしてそこから偏っていると感じている。だからこそ、カテゴリーの中のサンプルのエラーだと言いたいのです。その時、指摘する人にとってある種のカテゴリーが前提になっていると思われれます。

サンプリングエラーなどということを使うことは可能なのでしょうか。ある人が



図5-1

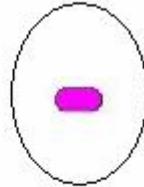


図5-2

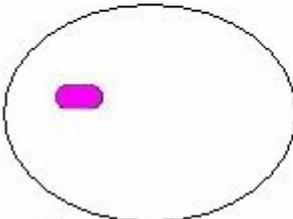


図5-3



図5-4

図5 サンプルとサンプリングと母集団を考える

ある研究のためにある人に出会った。その人のことを「偏り」とか「エラー」だとか言うことが可能なのでしょうか？

それは - エラーなどは - ありえないのではないか。むしろ「偏りだ」と言わせる力は何なのか。私などはその力の方に関心があります。左上の図の小さな点、これがたとえば対象者だとしましょう（図5 - 1）。その人だけのことしか分からない、というわけでもないで、その広がりというか転用可能性が想定されることになります。その時、図5 - 2のように小さくてもいいからその対象を中心にした円のような範囲のことを考えたいと思っている場合があります。ある意味で慎ましやかな態度です。しかし、「偏っている」と非難されたりする。それは、図5 - 3の図のような広がり（勝手に）想定をする人がいて、その対象は偏っている、と言うのだと思います。人の研究に対して暗黙に（勝手に）転用可能性の範囲を決めて、偏っていると批判するのはいかなるものでしょうか？この場合どのような対処法があるかと言うと、自分の説明範囲はそういうものではないと言って限定する方法（これは図5 - 2に相当）か、あるいは、理論化です。

偏っていると（親切にも？）指摘してくれるのであれば、その範囲を教えてもらってそれを補完するような理論を作っていけばいいのではないのでしょうか。偏りだという以上、中心のようなものがあり、そこを中心とした何らかの範囲を想定できるはず（図5 - 3の状態）。そうだとすると、非難する人が考えている範囲のようなものと自分の研究対象との関係を描写することが可能です。図5 - 4の矢印はそういうことを意味しているつもりです。「自分のサンプルはここだけど、こういう広がりをもっていると言われた。それを埋めるために理論的に考えたい」というように理論で補っていくのです。ここではあえて「範囲」という語を用い、「母集団」という語を用いていません。なぜなら母集団というものを想定する必要があるかどうかはきわめて微妙な問題で、その必要がないとも言える（しそもそも母集団など意味もないとも言える）のですが、これについては代表性や一般化の問題として考えたいと思います。

サンプリングというものはランダムサンプリングだけなのではありません。ランダムを強調するサンプリングにはその前提があるはずで、質的研究のサンプリングにその前提を持ち込むことが果たして良いのかどうかは疑問です。質的研究にとっ

ては、他のサンプリング手法の開発やその理論化（ホントの意味での方法論の開拓）こそが求められているでしょう。また、ついでに偏りではなく数が少ないという批判についても触れておきましょう。数を増やせばいいという話にはならないはずです。ところが実際には「ピアジェも3人やったから3人やれ」みたいなことが言われたりしている（笑）。ある島でフィールドワークをした人が「島が一つなのはよくない。3つの島でやってほしい」とレフリーコメントが帰ってきて怒ったという逸話がありますが、論文審査でこう言われるなら笑い事ではないでしょう。

サンプル数が少ないから増やせというような言い方も実は大問題です。つまり、数を増やせる、多くできるということは同じカテゴリーのものがあると前提すること（加算可能性を前提する）ですから、研究対象に関するきわめて単純なカテゴリー化が素朴に前提となっているのかもしれないのです。偏りがあるという言及も数が少ないという言及も、サンプルのカテゴリーという問題をあまりに自明視しているように思えます。

自分の研究の話から例をひきます。現在、ベトナムでは、お年玉を子ども同士であげるようです。お年玉は親から子どもにあげるものという考えをもっていたので、なかなか聞き出せないでいたのですが、ある人に面接している時にそういうことがわかった。それ以降は「お年玉を大人からもらいますか」という質問に加えて「お友だち同士でお年玉をあげますか？」と聞き始めました。「今年1年、いい年であるように」と子ども同士で50円ずつくらいあげるのだそうです。お互いにあげあうから同じくらいの額が戻ってくるそうです。

ベトナムの子どもは子ども同士でお年玉をあげる。日本ではほとんどない。こういう違いは文化集団に帰属すると誤りとなりやすいですが、何かの違いを反映しているということを考えてもいいでしょう。ところが「（ベトナムでお年玉をあげあっているのは）あなたが聞いた数例だけでしょう？」と言われることもある。2人目までは聞き方が悪かったからわからなかったけど3人目でわかった。それは1/3にすぎないのでしょうか。あるいはこれが100人でも同じです。100人目までは聞き方が悪くてわからなかったとして、1例だけからは何も言えないのか。そうではないのではないのでしょうか。

「子ども同士でお年玉のやりとりをしますか」という項目を用意しないで500人にアンケートをとって何も見えないデータと、3人にインタビューして3人目に何かが見えるデータとどちらが妥当なデータと言えるのでしょうか？

500人にアンケートをとる方が客観的で良い調査だと言えるのでしょうか。このようなことを言うと、面接のあとにアンケートをとれば良いということを行う人がいますが、それは問題のすり替えだと思います。

少数事例研究に対する批判は、「少なさ」批判と「偏り」批判が交絡しているように思えます。ここでは、サンプルの代表性の問題というより結果の一般化の時の問題として考えてみましょう。得られた結果や洞察がどこまで妥当なのか、ということです。この問題に対して、妥当性という言葉に代えてここでも「転用可能性」という言葉を使ってみたいと思います。もちろん、ここまではできないという「限定性」、過度の一般化を防いでいく必要もあります。「あなたがいうのはサンプルの問題ではなく、いわゆる妥当性の問題ですよ、妥当性の問題に関してはこういうことです」と言っていけば、少数事例の研究に関する非難はなくなっていくのではないのでしょうか。ちなみに、今、こういうことだとわかって、自分でも感激しています（笑）。「あ、そういうことだったのか」と感じ。もやもやしていることが話すことで明確になる。サンプルエラーのことが転用可能性で解ける、ということは2時間前はわかってなかったんです。もちろん、今考えた内容が正しいかどうかは皆さんのご批判を待ちたいと思います。

ベトナムで障害児を対象にインタビューをして「お小遣いをどう使うか」と聞いた時、その結果を聞いた人が「ベトナムの障害児でしょう。なぜそれを重視するの？」みたいなことを言うとするならそれは「排除の論理」です。特別な例かどうかはそちらの知ったことじゃない（というのは言い過ぎですが）。「私が対象にした子どもは、あなたの考えている子どもの典型とズレているだけですし、私はあるところにおいて研究してきたわけですから、それを元に考えるのはなぜいけないのですか？」と問うことがあっていい。カテゴリーを前提としたうえでさらに典型性までこしらえて問うのはまさに疑問視する側の暗黙の前提の反映に他ならず、「少数事例であてはまらない」と言うのは排除の論理がもしれません。

むしろ、ベン図でいうところの和集合的に考えるとどうなるか。子どもの可能性を考える際「ベトナムの障害児はこうなんだ」ということがある。他のところでもそういうことがある。たとえば日本では子どもたちはおごりあわない実態がある（少なくともおごりはダメだと親が思っていることを知っている）。ところが、ベトナムでは子ども同士でお年玉をあげる。そういう現象が4つも5つもあるなら、その最大限の範囲（いわゆる和集合）を考えて、それをまとめていけばいいのではないだろうか。

「少数事例だから典型性がないから一般化できない」のではなく、特殊性だとしたらますますいいじゃないですか。可能性が展望できるのです（楽天的すぎるかもしれませんが）。統計では外れ値と言って嫌うわけですが、質的研究が嫌う必要はないんです。特殊性があるだけいいではないか。人間の可能性はここまで広がっている。「あなたの考えている人間の典型性と違ったって、いいじゃないですか。あなたが考えている人間はここに位置する。私が聞いた人はこういうところに位置する。逆側にも同じ距離がある。もっといろんな人がいるかもしれない。いろんな人がいることがわかるじゃないですか」という言い方。特殊であることが外れているという議論ではなく可能性を示すという発想は、相関係数に基づいて人間を変数の束と見なし大集団をサンプルとする研究から見えてこない。たとえば学業成績や知能に関する継時的研究において2時点間の相関係数が0.3という話があると全体としては安定している、という話になりがちなのです。時点1から時点2で成績が変わったりした人が一人いても、それは外れ値と見なされる。全体としては、ある時点における成績とある時点における成績は安定しているということになる。安定しているからある時点の成績で未来予測をしていいということになり、入試や知能検査の得点で切ってもいいという話になるんです。もっとひどい例はいわゆる優生劣廃学で、知能が低いと子どもも知能が低いと予測されるから子どもを産むな、というようなことになっていました。

実際に2つの時点で相対的な位置が大きく変わっている人は外れ値だから特殊な例ということになって切られてしまうのです。そういう「下処理」をしておいて大多数は安定していると言われても困りますよ・・・。しかも、一人ひとりの成績が伸びたり落ちたりすることが現実なのに（安定することだって変化の1つのヴァリエ

ーションです)、それを相関係数という一つの指標に表すことで見えさせてもらえない。全体で安定している、それを相関係数が示しているなどどくくるのは大きな間違いかもしれません。個人個人がどう変わったかを見ていく。典型例とずれていればずれている程、可能性があっていいじゃないでしょうか。いろんな人がいて「よかった」という話ですね。「人間を見る視点が増えてよかったですね」という感じ。

私がお小遣いの研究でノーベル平和賞をとろうと言うと(笑)賛同者は一人で、韓国の崔順子(ちえ・すんじゃ)さんしかいないんです。でもこの研究ではお金をめぐって多様な生き方があることがわかるのです。多様性を知ることができます。多様性がわかり許容できると人と争う気がなくなります。お金の使い方は争いの原因なので、それがわかれば平和に暮らせる方法もわかるということです。

話を戻しますと、サンプルエラーだといって非難されることは、サンプルの代表性の問題とは違うのだということです。ある一人しか聞いてない研究だからダメだと思うくらいなら、研究発表の時にそういうエクスキューズ(言い訳)をつけるくらいなら、代表性があるサンプルでやった方がいいのです。高野陽太郎さんという方(高野、2000)が統計の本で「日本人についてやるならば、過去の人間についてもサンプリングすべきである」と全うなことを言っていました。死んだ人のデータもとるのが、日本人を母集団に想定した時のデータの取り方です。勝手に一部分で日本人を代表するようなことは言うな。もちろん高野さんは所詮、無理なんだと言っていますが。

3 まとめ

今回のお話では、心理学における質的研究の位置づけをお話しました。なぜ心理学にこだわるか。それは、心理学は他の学問、たとえば社会学と違うからです。今、オーラルヒストリーの研究会に出ているんですが、文学や社会学の人と一緒になのでその違いが分かって面白いです。心理学とはまず問題設定の仕方が違います。社会学は社会のことを知りたい。一人の人生を知ることで社会のあり方を知る。心理学

は自分のことを知る。自分は何か。人間が考えるのはどういうことか。もちろん、両方とも欠陥はあります。

学問の世界につながる人間として、特に修士論文執筆中などは学範（ディシプリン）との闘いなので、個人の力でそれを崩すことは難しい。ただしこだわるからこそ将来他の分野と融合できるのだと思います。トランス、溶けるためには個が確立していないといけない。これは一種の矛盾ですが、そう思います。融合のためには確固としたものがが必要です。アメリカでパーソナルがトランス(trans)することがなぜ重視されるのか（たとえばトランスパーソナル心理学などは日本よりよほど流行している）。個々人のパーソナルな部分がしっかりしているからです。アメリカのトランスパーソナルをやっている人は「日本の人間関係は個が確立していない、トランス（融合）している」と思ったりします。だからといって日本の人が意識してトランスパーソナルを楽しんでいるわけではないのは言うまでもありません（くどいようですが、酩酊の意味の「トランスする」はtranceで違う単語だということを再度指摘しておきます）。

あることに関して一生懸命やって、ある枠組みでこういうことがわかる、だからこういう方法を使う。そのために質的研究が必要だ。もちろん、質的とは違うアプローチからは批判がある、それを乗り越えるという方法を個々人が作っていくことによって、そうやって何かを書いたりした後で、初めて社会学の人たちと質的研究に関する連携ができるのではないのでしょうか。自分たちはこういう問題設定だからこういうことをやっている。看護学でもこの部分ならこのように使える、こういう風に転用可能性と限定を考えることが大事ではないのでしょうか。看護学は患者の看護こそが大事だ。どう治っていくか、どう支えていくか、のプロセスがある。その中のある部分の研究には、心理学で作られた知識が有用だ、というものが必ずある。今ここでは別の道を行こう。でも必ずつながる。そういう限定をつけた上での転用可能性を訴えることが重要です。

質的心理学研究と言ったときに、「質的」や「心理学」にしっかりとこだわっていくしかない。そのこだわりこそが他との関わりを作っていく。排他的にならないように注意する必要はもちろんありますが。

看護・福祉・教育・保育・心理など、それぞれの領域においては、人間への関心が高まっているのではないのでしょうか。これはなぜか？人間が人間として接する部分が重要だということが出てきたこと、制度的に、心理、看護、福祉を大学院などで勉強する人が増えてきて、関心の範囲が広がってきたのも一因だと思います。

実践活動を通して研究するときには実験的な方法は難しくなっていきます。患者さん相手に実験できることと、できないことがあるので、質的研究の重要性が高くなってくると思います。

私は最近「ボトムアップ人間関係論」を主張しています（佐藤、2004を参照）。なぜかウケる。枠組みもできてくるわけですが、人間とはこうだから、教育とはこうだから、福祉はこういう制度だからという話をトップダウンに始めるのではなく、人と人がどう接するという枠の中で、どう人が変わっていくかを見てみたいのです。人と人がどういう関係性を持っていくかということに関心をあてることで、学識領域としての人間科学をつくっていくことが可能ではないかと考えています。

ただ、他の学問分野と比べた時の心理学というのは、理論家がほとんどいない、データになじみがある人が大多数だ、という特徴があります。そういう意味で実証データの取り方に関心を持つ人が多いのかもしれませんが。転用可能性の高い技法を工夫する人も多いことを祈るのみです。

知能検査の発達の歴史を見ても知能検査を改定するのは心理学者の仕事になったわけです。知能検査は文化や時代によって変えていかないといけない。標準化をしないといけない、道具自体を。知能遅滞という現象には、教師や医師も関心を持っていた。しかし道具を作ることにはなかなか関心がいかない。教育理念とか治療技術の開発に関心がいきます。社会が求めているのはそういうことです。その点、心理学（者）は実際に何かをする時の道具作りをすることに興味を持ちやすい人が多い。社会からもそれを期待されている。そういう特殊な文化があるわけです。学問の中の文化であるわけです。質的に人を見るということ自体、研究テーマとして成り立ちうるのだということはあると思います。

最後に、「評価」の問題をどうするかということ述べて終わりたいと思います。学問に限らず誤りは必ずあります。学問は誤らない方がいい、しかし学問に限らず私たちは必ず誤ってしまいます。誤りのない判断、誤りのない行動というのはあり

得ない。それは分かっているのだから「意識していませんでした」というわけにはいかないでしょう。つまり、誤りをどうコントロールするか、このことを評価と結びつけて考える必要があると思います。

質的研究のおもしろさ、生活状況と人間を考えることのおもしろさ、そういうことを支援できるような評価方法を構築していくことが私たちに求められるということを感じています。

文献

- ガーフィンケル他（山田・好井・山崎編訳） 1987 『エスノメソドロジー 社会的思考の解体』 せりか書房
- Gibbons, M., Limoges, C., Nowotny, H., Schwartzman, S., Scott, P., & Trow, M. 1994 *The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary societies.* (ギボンズ他 1997 小林信一監訳 現代社会と知の創造 モード論とは何か 丸善)
- 箕浦康子(編著) 1997 フィールドワークの理論と技法 ミネルヴァ書房
- 能智正博 2001 質的研究 丹野・下山(編)臨床心理学研究(講座臨床心理学第2巻)東大出版会 第2部第1章。
- 西條剛央 2003 「構造構成的質的心理学」の構築：モデル構成的現場心理学の発展的継承 質的心理学研究、2、164-186。
- 佐藤達哉 1997 「フィールドワーク・クラスのエスノグラフィ」 箕浦康子編著 「フィールドワークの理論と技法」ミネルヴァ書房 第12章 Pp.196-219.
- 佐藤達哉 2001 「流言 - その定義と実際」山口裕幸(編)「心理学リーディングス」第10章 ナカニシヤ出版 Pp.171-187.
- 佐藤達哉 2002 「モード・現場心理学・質的研究；心理学や教育心理学についての起爆力」 下山・子安(編) 『心理学の新しいかたち』 誠信書房 Pp.173-212.
- 佐藤達哉 2004 ボトムアップ人間科学の可能性 『現代のエスプリ』、441、至文堂

- サトウタツヤ・高砂美樹 2003 流れを読む心理学史 有斐閣
- サトウタツヤ・渡邊芳之・尾見康博 2000 心理学論の誕生 北大路書房
- 澤田英三・南博文 2001 質的調査 - 観察・面接・フィールドワーク 南風原・市川・下山(編) 心理学研究法入門: 調査・実験から実践まで 東大出版会 第2章
- 高野 陽太郎 2000 因果関係を推定する 無作為配分と統計的検定. 佐伯・松原(編) 『実践としての統計学』 東大出版会 第3章.
- Valsiner, J. 2001 Comparative study of human cultural development. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.
- 山本登志哉・高橋登・サトウタツヤ・片成男・呉宣兎・金順子・崔順子 2003 お金をめぐる子どもの生活世界に関する比較文化的研究: 濟州島調査報告 共愛学園前橋国際大学論集, 3, 13-28。
<http://dengzhizai.hp.infoseek.co.jp/papers/cheju.PDF>